平安初期における北東アジア世界の交渉と現況
―張保皐と円仁を中心として―

李　　炳　魯

1．はじめに
2．張保皐の北東アジア世界の形成
3．円仁の北東アジア世界との交流
4．結び

1．はじめに

21世紀のグローバル化時代を迎え、北東アジアの各国はこの地域の緊張緩和と平和のため努力を傾けているが、自国中心の利益を優先するために生じる高い壁を崩すのは現実的にかなり難しいことであろう。これを克服するためには、我々が一日でも早く自国史中心の歴史観から離れて、北東アジアの視点による交流を行わなければならない。そうでなければ、互いに理解しあうことはできず、北東アジアの真の平和も創出することができないと思われる。

今から約1,200年前に、北東アジアにおける交流の先駆者として登場した人に張保皐がいる。彼は黄海と東シナ海を囲む北東アジア世界を活躍の場とした。たとえば、張保皐は経済的な目的から、東アジアの貿易世界を統合して君臨したが、そこに含まれた朝鮮半島･中国･日本の構成員らは、国家やその国境を越えた一つの共同体を形成していたのである。まさに、「環中国海貿易圏」設立がそれである。この環中国海貿易圏を通じて商人らはもちろんのこと、官吏や僧侶、それに学者なども朝鮮半島・中国・日本の三地域を往来しながら、互いの交流を深めて行ったのである。

9世紀に入ると、日本は838年の承和遣唐使を最後に、遣唐使の派遣を廃止した。それにもかかわらず、日本の僧侶らは唐の仏法を学ぶために、競って唐へと渡ったのである。円仁、円載、恵運、恵萼、円珍などは、張保皐がすでに構築していた航海ネットワークを通じて、唐と日本を往来した。恵萼のような僧侶が4度も唐－日本間を往来したことから推測すると、当時の北東アジア世界を結ぶ船便は定期的に運行されており、航海も存外安全であったことがうかがえる。このように発達した航路とすぐれた船員らが存在していたからこそ、高丘親王も自ら入唐する決心を行ったのだと思われる。

特に、838年の承和遣唐使とともに唐へと渡っていった円仁は、求法活動のため9年間の波乱万丈な留学生活を経験することになる。彼は入唐に始まり、唐での生活と帰国までの状況を自らの日記にしたためている。その日記を通じて我々は、張保皐が築いていた環中国海貿易圏を円仁が経験し、またその人的ネットワークを活用して彼が入唐の目的を達成したことのみならず、当時の北東アジア世界で行われた活発な人的、物的交流の姿をみることができるのである。

以上の背景に基づき、本稿では張保皐を通じて当時の北東アジア世界がどのように形成されていたのか、また円仁を通じて人的、物的交流がいかに行われていたのかを明らかにし、さらにそれらのことが現代の我々に示唆することについて考察してみることにする。

2．張保皐の北東アジア世界の形成

新羅の後期（780-935年）は、政治と社会の矛盾により地方制度に対する中央政府の統制力の弱化と、逆に地方豪族の台頭が本格化する時期であった。王権に対抗する貴族層の反乱が相次いで発生するようになり、9世紀に入ると、ますますその傾向は激しくなるのである。憲徳王代（809-825年）に入るや、ついに地方でも草賊の蜂起や地方官の反乱が断続的に発生していくのである。

このような反乱は、最終的には失敗に終わったが、新羅社会に大きな影響を及ぼした。その一つは、地方豪族の地方割拠的な傾向をさらに促進させたことであり、もう一つは、地方豪族の830年代から熾烈に展開される王位継承戦の幕をあけさせたことであった。おそらく、張保皐もこのような背景を通して刺激をうけた可能性が高かったと思われる。結局、このような時代背景を基盤として張保皐の海上勢力は誕生した。

張保皐という人物に関する記録が韓中日の三国でそれぞれみられるというのは、大変珍しいことである。それほど彼は国際的に活躍した人物であったということであろう。張保皐は820年代から清海鎮を基盤として黄海と中国海の海上経営権を掌握した。ライシャワー博士は彼を「海洋商業帝国の貿易王」と呼ぶほどであった。

それでは、張保皐が築き上げた環中国海貿易圏がどのように形成され、その実体はいかなるものであったのだろうか。

張保皐は清海鎮で生まれ、唐に渡って軍人となり、李師道の乱を鎮圧するなかで功績をあげ、軍中小將にまで昇進した。彼は唐で勢力を伸ばし、在唐新羅人らの実質的なリーダーとして君臨したと思われる。この当時の中国大陸では、高句麗と百済が滅び、強制移住させられたその両国の移住民の子孫が多く居住していた。また、8世紀の後半以降は、新羅の政治と社会の不安によって唐に渡った新羅人らも多かった。彼ら在唐新羅人らは、主に唐の海岸地域に居住しながら、貿易と海上業に従事していたのである。彼らは、自らの事業を守ってくれるリーダーを求め、まさにそれが張保皐であったと思われる。『三国遺事』

によると、張保皐はもともと義侠心に厚い人だったようである。したがって、彼は唐で培った基盤を背景にして、自然に在唐新羅人のリーダーになったと考えられる。

一方、張保皐がいつ唐を離れ清海鎮に基盤を固めたか、その時期は正確ではない。『三国史記』の記事によると、

> 清海鎮大使の弓福は、姓が張氏（分注。保皐ともいう）で、唐の徐州（中国江蘇省徐州市）にゆき、軍中少将となり、のち帰国して王に拝謁し、兵卒一万人を率いて、清海鎮を鎮守した（分注。清海は今の莞島である）。

上記の記事からどの部分が興徳王３（828）年に該当するかは明確でない。金庠基は、清海鎮が設置された年が828年であろうとみている。しかし、浦生京子はこの記事から、清海鎮設置の以前に張保皐はすでに清海鎮大使を名乗っていたと解釈できると主張している。興徳王３（828）年以前に、「保皐はすでに地方の新興勢力者として地盤を固め、保皐自身が『清海鎮大使』という職名を使用しており、その自称の職名および彼の勢力が新羅朝廷によって正式に認定されたのが同年（828）であったとも推測できる」とのことである。これを踏まえ、清海鎮設置の具体的な時期は、821年の銷兵政策開始から828年のあいだであると推定するのである。

しかし筆者は、張保皐が824年に来日した次の記事に注目してみたい。

> （前略）新羅人の還俗僧李信恵は弘仁の未の年（弘仁６年［815］）に日本国の大宰府にやってきて滞在すること八年。須井宮が筑前の国の太守であったとき、この人たちをあわれみに助けられた。張大使は天長元年（824）に日本に来て唐の国に戻り帰るとき船に乗せて彼を連れ帰ったのであるが、彼は現にこの寺荘に居住している。日本語がわかるので早速通訳した（後略）。

上の記事によると、第一に、新羅人の李信恵は815年から約８年間にわたり、大宰府に滞在していた。第二に、清海鎮設置以前の天長元年（824）に来日した「張大使」が唐に戻り帰るとき、８年間も滞在していた李信恵を連れ帰った。李信恵が大宰府に滞在した理由は正確にわからないが、その後、彼は赤山法花院で日本の通訳の仕事を担当していたこと、当時、新羅商人たちが頻繁に来日して大宰府の官人や豪族とも交易を行っていたこと、そして長期間の大宰府での滞在などを重ね合わせてみると、彼の任務は交易にあったと十分考えられるのである。

日本語が上手であり、また官人とも交流が深かった李信恵は張保皐にとって必要不可欠な人物であったと思われる。824年に来日した張保皐は日本との交易のため彼を唐につれて帰ったのであろう。そうだとすれば、824年の張保皐の来日も交易のためであり、また

大宰府管内に居住して対外貿易活動を行っていた「在日新羅人」を自分の配下にしようとする目的もあったのではないかと思われる。なぜならば、張保皐は長期間にわたる在唐経験によって節度使の対外交易を熟知していた。李師道の乱が鎮圧された後、大宰府と交易の可能性があるか否かをうかがうために来日したが、そこで日本の事情に詳しい李信恵をつれて帰ったのではないだろうか。帰国後、彼は対日貿易の中継地として自分のふるさとである「清海」に鎮を設置したと思われる。結局、張保皐は銷兵政策が始まった821年から824年の間に日本との交易の可能性を打診し、また824年を前後にして清海鎮に基盤を築いたのである。それが興徳王3（828）年に正式に認められたのではないかと思われるのである。

さらに、820年に唐人李少貞など20人あまりが東北の出羽の国に漂着したことも、張保皐と関連があると思われる。李少貞は張保皐の部下として活動しながら、842年に張保皐の暗殺を知らせに大宰府にきた新羅人である。したがって、この当時の李少貞は、唐に居住しながら交易活動に従事していた在唐新羅人であったことが理解されるのである。この時から、彼が張保皐の部下として活動したかどうかははっきりしない。しかし、この当時すでに張保皐が在唐新羅人のリーダーであったこと、中継貿易のため824年に張保皐が直接大宰府を訪れたことなどから推測してみると、張保皐が対日交易のために李少貞を派遣した可能性も十分考えられる。円仁の日記によると、もう一人の在唐新羅人である王請もともに来日している。そうであるとすれば、張保皐はまず李少貞と王請を派遣して日本との交易の可能性を調べさせた後、自分が直接大宰府にわたり、その可能性を確認し、交易に必要な人物として李信恵をつれて帰ったのではないか。その後、李信恵は赤山法花院で通訳の仕事を、李少貞は清海鎮で中継交易の仕事を担当したことからも、それをうかがうことができるであろう。

こうして張保皐は清海鎮を拠点として唐と日本列島を結ぶ三角貿易を活性化させる一方、日本の僧侶たちが入唐求法するとき、船便を準備して彼らの航海を担当しているのである。次に張保皐が活躍したこの時期の様相を、史料を通じてみることにする。

新羅人の交関物を検査して引き取ること

①（前略）愚闇の人民たちが自分の資産を全部払い、（新羅の交関物を）買いに飛込んでしまい、結局家産をすべて使ってしまっている。これは外来品に陥溺し、国内品を軽視するためである。これは実に看過できない悪弊である。大宰府に命じて厳しく禁止するようにせよ（後略）。

②私が大宰府と筑前国の講師になったとき、新羅商人が頻繁に往来しました。彼らに会って椀と皿を購入しました。道場を準備して国家のため経典を読むためであります。

③（前略）壹岐嶋の島司が報告した。今、新羅商人の往来が絶えず続いており、警

戒の任務を強化しなければなりません。願わくは一人の史生を減らし、一人の弩師をおくことを要請致します。

④大宰府が、新羅人である張保皐が去年の12月の末に、馬の鞍を進上したと報告したのである。保皐は他国の臣下であり、朝貢を捧げることは礼にそぐわない。(中略)。持ってきた品物は民間に許し、交易をするようにせよ。ただ、人民たちが公定価格にて買うようにし、競争して家産を無駄使いしないようにせよ（後略)。

まず①の記事は大宰府に住んでいる愚かな百姓が、外来品を好み、家産を使いはたすことまでしながら、新羅人がもたらした舶来品を買っている姿を描いている。831年にこれを厳しく取り締まるように太政官の官符が出されたことは、すでに新羅商人が大宰府などに渡ってきて活発な交易を行っていることを裏付けている。すなわち、張保皐に統合された新羅商人たちが大宰府で王臣家をはじめする豪族層や官人たちと積極的な交易活動を展開していたということである。これに一般百姓まで交易に参加して家産を使い捨てているので、私交易を禁止させる官符が831年に出されたのであろう。

しかし、このような禁止令にもかかわらず、新羅商人たちは日本列島に渡ってきて交易活動を続けた。これは史料②と③をつうじて確認できる。②の史料は惠運という僧侶が書いた日記にみられる記事である。彼が大宰府と筑前国の講師として任命されたのは、天長10（833）年ごろだと推定される。そして彼が842年に入唐するまでほぼ10年近く、九州地域で講師をしながら多数の新羅商人と取引をしていたことがわかる。この記事を通じて官符①の内容、すなわち新羅商人との活発な交易行為が840年前後にも依然として行われていることを知ることができる。おそらく、惠運はこの当時、頻繁に来日している新羅商人との交流を通じて842年に入唐することができたし、自らも唐留学の夢を実現することができたと思われる。

③の記事も同様である。これは壱岐嶋へ頻繁に渡ってくる新羅商人に関する内容である。壱岐嶋は朝鮮半島から新羅人が渡ってくるとき、対馬と同じように中継地の役割を果たしているところである。多くの新羅商人が渡ってくることから嶋司は危険を感じ、警備兵をおくように中央政府へと要請している。この当時、壱岐嶋以外の対馬やほかの九州地域にも多くの新羅人が来日している。彼らのなかには、政治的、社会的な混乱を避けて日本列島に渡ってくる人もいたが、壱岐嶋に来日しているような新羅商人たちも多数含まれていたと思われる。したがって、820年代に入るとすでに、九州地域の各地に新羅商人が来日して、活発な交易活動を展開している姿を確認することができるのである。

それでは、張保皐は日本の官吏たちとどのような交流を持っていたのであろうか。円仁の日記を通して考察してみることにする。

824年に来日した張保皐は大宰府や筑前国など、九州地域の官吏や豪族とも交流をもっていた。円仁が唐に留学する当時の筑前国の太守が小野末嗣であった。円仁は、彼の紹介

状を持参して張保皐に渡すつもりであった。小野家は代々外交関係の職務に携わっていた。このような家柄の彼は、筑前国の受領を務めながら、張保皐の部下らと交流を始め、またこれをもとにして、張保皐とも交流するようになったと思われる。彼が円仁の航海の安全と帰国の先便を依頼する推薦状を書いたのも、まさに張保皐との親密さのゆえであったと思われる。

張保皐は小野末嗣以外にも、多くの官吏と交流を行っていた。文室宮田麻呂との関係がそれである。関連史料を引用する。

> （前略）また言うには、「李忠などは廻易を終えて本国（新羅）に帰りましたが、その国で乱に遭って無事に到着することができず、また筑前国の大津にもどってきたところです。その後、於呂系などが帰化してきて、『我々は張保皐がおさめていた島の百姓であります。張保皐が昨年（841 年）11 月の中に死んでしまい、平安に暮すことができないのであなたの国に来たのであります』と言いました。この日以前に、筑前国の国守である文室宮田麻呂は李忠等がもたらした様々な品物を奪い取ったのであります。彼は『張保皐が生きている間、唐物を買うために、絁（あしぎぬ）を先払し、後でその品物をもらうことにしたのですが、その数は少なくありません。しかし今になって張保皐が死んでその品物をもらうことができなかったので、張保皐の使節がもたらした品物を奪い取ったのであります』と言いました。たとえ国の外の人が我々の土産品を好んでわが国に渡来するといっても、その心を快くうけいれ、彼が求めているものをえるようにしなければなりません。しかも、廻易使がもってきた品物を奪い、商売の権利さえ絶ってしまいました。これは府司が調査・監督をしなかったので勝手に他人の品物を奪ってしまうようになったのです。これは商人の財貨を失わせるだけではなく、更には、君主の法もないということを表わすことになる」。大宰府に命じて奪った色々な品物を調査･記録して、返すべき物は返し、また理由をよく説明して、さらに食糧を支給して本国に帰国させることにしたのである。

これは張保皐と文室宮田麻呂との間に行われた交易の一面をうかがい知ることのできる史料である。すなわち、この史料を通じて次のことを知ることができよう。第一に、文室宮田麻呂は張保皐に交易の対価として前もって絁を先払したこと。第二に、文室宮田麻呂は、張保皐が突然暗殺されると、彼の部下である李忠などがもたらした交易物を押収したこと。第三に、日本政府は文室宮田麻呂の行為が商権を乱すことであるとして、彼が押収した交易物を返すよう大宰府に命令を下していることである。

一見、文室宮田麻呂のとった行動は正しいことのように思われるが、ここでは官吏たちの交易に対する主導権争いが存在した可能性も否定できないであろう。文室宮田麻呂が筑前国の守に任命されたのは 840 年 4 月 6 日であり、841 年正月 13 日には南淵年名が筑前

国の守として任命されている。したがって文室宮田麻呂の在任期間はわずか９ヶ月に過ぎない。この当時の守の任期が４年であったのに、なぜ文室宮田麻呂は１年にも満たないうちに解任されたのであろうか。それは、当時大宰府の大貳として勤めていた南淵永河と新羅の交関物をめぐってトラブルが発生したからではないかと思われる。

南淵永河は 837 年から 842 年までほぼ５年近く、大宰府の大弐として勤めていた。彼も、すでに張保皐とも交易を行っていたと思われる。なぜならば、当時の大宰府と筑前国の官吏らはほとんど張保皐と交易を行っていたからである。そこに新しく赴任した文室宮田麻呂が、張保皐と貿易の取引をはじめ、南淵永河の領域まで踏み込んでしまったのではないだろうか。これが南淵永河の反感を買うことになり、文室宮田麻呂の在任期間はわずか９ヶ月で終わることになったのではないかと考えられる。また、文室宮田麻呂の後任に南淵永河の長男である南淵年名が任命されたことも、これと無関係ではないと思われる。当時の大宰府の実力者であった南淵永河は、張保皐との交易を独占するため、文室宮田麻呂の後任として自らの長男を積極的に推薦したとも考えられる。

ただし、文室宮田麻呂は解任以降も大宰府に残り、大胆に張保皐と交易活動をおこなっていたのである。彼は張保皐、または彼の部下たちが再来日するとき、唐物をもたらすように、予約金として絁を先払したのである。しかし、張保皐の暗殺という突然の出来事が発生して文室宮田麻呂の計画は露と消えてしまった。

しかし、より重要なことは、張保皐と文室宮田麻呂との売買方式が、高度の商慣習に基づいた信用取引であったという点である。もし、張保皐の部下の来日が１年か２年先のことであったり、彼らの来日の日程がはっきり保証されていなかったりしたならば、文室宮田麻呂は予約物として絁を先払するはずがなかったであろう。日本の五島列島から東中国海を直接通って揚州方面に航海するならば、たいてい１週間ほどの道のりであるが、清海鎮をへて山東半島の赤山院までの航海日数は、遅くとも１ヶ月ぐらいかかったと思われる。場合によっては、清海鎮に唐物を準備しておき、注文に応じて清海鎮と日本列島を往来すれば、より時間は短縮されるであろう。この点を考慮してみると、少くなくとも張保皐の部下であった新羅商人たちは１-２か月に一度ぐらいは来日していたと思われる。９ヶ月しか勤めてない文室宮田麻呂が張保皐と信用取引をする間柄ならば、文室宮田麻呂より以前に赴任していた大宰府や筑前国の官吏たちは、文室宮田麻呂の場合よりもさらに頻繁な信用取引を張保皐と行っていたといっても間違いではないであろう。それほど張保皐は、日本列島の人々と交易を通じて交流を拡大していたのである。

３．円仁の北東アジア世界との交流

円仁が天台請益僧の資格により第 17 次遣唐使の一員になったのは承和２（835）年のことであった。しかし、承和遣唐使は２度の出航が失敗に終わり、その過程で遣唐使の四つ

の船のうち、第３船の破損の程度が激しく、結局運行することができない状態となってしまった。その後、船の整備を終えた838年６月17日、第１船、第２船、第４船に分乗した遣唐使の一行は、唐に向かって博多港を出発した。途中、五島列島を経て、約２週間の航海をした後、中国の揚州海陵縣白潮鎮桑田郷東梁豊村に到着したが、大きな波が押し寄せ船は大破し、ほとんどの荷物は流されてしまった。この際、張保皐に手渡す紹介状も波にのまれてしまった。

遣唐使の一行は揚州に移動してそこで留り、長安へ行く準備をはじめた。結局揚州には２ヶ月の間滞在した後、ついに大使の藤原常嗣をはじめ35名は、皇帝に謁見するため長安に向けて出発した。円仁をはじめとする残りの遣唐使一行は、揚州の寺で経典を複写したり、仏画や仏像を模写したり、あるいはそこの僧侶から仏法を学んだりしたのである。

円仁は大使を通じて、自らの身分を唐に滞留することが許される留学僧に変更してもらえるよう皇帝に依願するが、皇帝はこれを許さなかった。すでに円載のような留学僧が滞在しており、これ以上の留学僧を認めなかったのである。そのため、円仁は唐での不法滞在を決心した。

遣唐使の一行は、楚州で再び合流した。ここで遣唐使の一員として参加していた新羅人の金正南は、帰国船を探し求めて、新羅船９隻と新羅船員60人あまりを雇い、帰国の準備を終えた。入唐時に遣唐使が乗船してきた第１船と第４船は、破損の状態が激しく、帰国船として利用することができないほど危険だったからである。

楚州を出発した遣唐使一行は、新羅船に分乗して海州の管内である東海縣の東海山に到り、そこで一時停泊した。ここで一行は、帰国の順路を巡って対立することになる。新羅船員は密州の管内の大朱山を経由し、そこで船を修理してまっすぐ日本のほうに出航しようとした。この意見に大使は賛成したが、これに反対する意見も強硬であった。そこでまっすぐ日本のほうに渡航することにした。帰国途上において、新羅で神武王を擁立する内乱が起こったことを知った遣唐使の一行は、これに巻き込まれる可能性を憂慮し、直接日本へ渡航しようとしたのである。それほど張保皐が掌握していた当時の北東アジア世界の情報は早かった。

唐に不法滞在してでも仏法を学ぼうとした円仁は、この際に日本へ向けて出発する遣唐使一行と別れることになる。ここで円仁は、炭を焼く新羅人に会い、自分も新羅人だといったが、すぐに日本人であることが発覚してしまった。円仁は新羅人の村である宿城村まで案内され、そこで唐の官吏に預けられ、結局、まだ出発してない遣唐使の一行に引き渡されてしまった。円仁が最初に試みた唐での不法滞在は、こうして失敗に帰してしまったのである。

その後、新羅船９隻と第２船は、乳山浦を経て登州の赤山院に到った。遣唐使の一行を乗せた新羅船９隻は、この赤山を出発し、無事博多へと到着した。承和遣唐使は、二度の渡航の失敗、さらに副使であった小野篁の乗船の拒否、唐に着くやいなやの波浪など、危

険を乗り越えて任務を果たすことができた。この過程で新羅人の助けがなければ、決して承和遣唐使は無事に帰国することが叶わなかったであろう。この事実を通じて、９世紀における韓中日の三国の人的交流をうかがい知ることができるのである。

一方、円仁は海州で試みた唐での不法滞在が失敗した後、遣唐使の帰国船である第２船に乗ることになった。おそらくこの時点では、円仁は唐での求法活動を放棄して帰国する決心をしたのであろう。しかし円仁は、張保皐の動静、すなわち張保皐が新羅王子を助けて新しい王をたてたということを伝え聞き、再び唐に留まる決心をしたようである。新たに即位した王は、神武王である。これを聞いた円仁は、すぐさま新羅人の通訳である道玄に依頼し、唐に滞在することが許されるかどうかをたずねた。道玄は、新羅人と相談し、それは可能であると回答したが、円仁は慎重にも、邵村の村長を勤めている新羅人の王訓にも、唐に滞在が可能であるか否かをたずねてみた。それほど円仁は不安で満ちていたことがうかがわれる。王訓は、もし円仁が唐に留まることになれば、積極的に手助けすることを約束している。ところが、円仁が乗船していた第２船の判官などの日本人官吏が快く賛同しなかったため、円仁は唐滞在の意志について動揺を来したようである。

そうであるにもかかわらず、円仁は唐に留まり、仏法を求めたいとする気構えだけは強かったようであると思われる。この時期、張保皐の交関船２隻が赤山浦に到着しており、また新羅に派遣する唐の使節団が赤山院の法花院を訪問していた。またその夜には、張保皐が派遣した大唐買物使である崔暈が法花院を訪問した。翌日の朝になって円仁は、道玄とともに客房へと入り、唐での不法滞在のことを議論したという記事をみることができる。おそらく円仁は、張保皐の部下である崔暈などに願い出た可能性が高い。同時に、赤山法花院の新羅人たちはもちろんのこと、崔暈などが唐滞在を手助けしてくれるという約束を聞きつけ、最終的には唐に滞在することを決心したと思われる。それは、赤山法花院の新羅人たちが、円仁の合法的な滞在のために唐の官吏と積極的に交渉している姿からうかがうことができる。それほど円仁にとっての唐での求法活動は、生涯をかけての念願であったということが理解される。

円仁が赤山法花院に滞留している間に、承和遣唐使を乗せた新羅船９隻は日本を目指して出航した。その結果、円仁は唐に残され、不法滞在の身分になってしまった。これを知った文登県の官吏は、円仁一行が不法滞在したことについて、赤山法花院を通じ厳しく叱責している。これに対して赤山法花院の主僧である法清は、管轄の官庁である文登県を相手にして、円仁が唐での求法活動ができるよう、積極的な努力を行った。その交渉はかなり困難を極めたようであり、円仁が合法的な滞在を許されたのは、越年した840年の２月末ごろのことであった。つまり、許可を得るまでにほぼ６ヶ月もかかったのである。これは法清をはじめ張詠などの赤山法花院の新羅人らが、唐の官吏を相手にして粘り強く交渉した結果であると思われる。

円仁は赤山法花院に１年近く留まりながら、新羅人はもちろんのこと、近辺の唐人、あ

るいは唐の僧侶らとも活発な交流を行った。その姿は彼の日記を通じてもうかがうことができる。またこの事実を通じて、北東アジアの民間交流がすでに1,200年前に存在したこともわかる。

唐の官庁から正式な旅行許可書を受け取った円仁は、五臺山に向かい出発した。当初の計画では天台山に向かうつもりであったが、赤山院からはあまりにも遠方かつ南の方角にあるので、赤山法花院から多少とも近い五臺山に行って仏法を学ぼうとしたのである。近いとはいえ、2千里以上の道程である。五臺山に向かう彼の路程は苦難の連続であったが、新羅人の居留地である新羅院や唐人の家に留まりながら、彼らと交流を行っている姿は想像に難くない。

円仁の所期の計画によれば、彼は唐で仏法を学び、翌年の840年に帰国するつもりであった。彼が崔暈を通じて張保皐に送った手紙から、その事実を知ることができる。その手紙によると、赤山法花院に留まらせてくれた好意に対して感謝の気持ちを記した後に、自らの帰国先便を頼んでいる。彼は、五臺山を巡礼してから赤山法花院に戻り、ここから新羅船に乗って清海鎮を経て、日本に帰りたいという希望を張保皐に伝えている。また、円仁は、自分が故国を離れたとき、筑前国の太守である小野末嗣が自らのため書いてくれた張保皐あての紹介状を持ってきたが、唐に到着したとき、激しい波に襲われて所持品とその紹介状が波にさらわれてしまったことを悔やんでいる。その手紙では、自分の帰国の日にちを来年（840年）の秋になるであろうと予想している。

円仁の旅はほぼ2ヶ月に亘ったが、ようやく五臺山にたどり着くことができた。そこで円仁は仏法に対する疑問を氷解することができ、五臺山の頂上にも巡礼することができた。

3ヶ月ほど五臺山に留まった円仁は、長安へと向かった。840年7月1日のことである。それから2ヶ月足らずの8月22日、円仁はついに長安に到着した。円仁は長安の資聖寺に留まった。彼がもっとも関心を有していたのは密教であった。円仁は長安で有名な密教の僧侶らをたずね歩き、彼らが所蔵していた経典を写したり、密教を求めたりした。とりわけ円仁がもっとも面会を望んでいた僧侶は、大興善寺の元政和尚と青龍寺の義眞和尚であった。元政和尚からは金剛界大法の受法を、義眞和尚からは胎藏、蘇悉地大法の受法を修了すれば、長安での任務を終えることになる。この時点で、すでに入唐してから3年、長安にきてから1年を経た、841年の8月になっていた。

このときから円仁は、帰国の許可をもらうために唐の官庁に文書を出しはじめたが、なかなか許可が下りなかった。842年になると、武宗による大々的な仏教弾圧政策である「會昌廢佛」が出され、僧侶たちは弾圧をうけるようになる。不安にさいなまれた円仁は、一日も早く帰国するために唐の左神策軍押衙である李元佐に願いでた。彼は新羅人として仏心も厚い人であり、円仁を心から支援した人物であった。

年を重ねるにつれて弾圧は次第に激しくなり、845年には、50才以上の唐の僧侶はすべて還俗させる旨の命令が出され、その法令はついに外国の僧侶にも適用され、円仁も還俗

させられることになった。結局、還俗させられた円仁に帰国命令がくだされたため、彼は日本へと帰国するために長安を離れた。長安を離れる際に、李元佐は長安城の５里先まで円仁を見送りながら、別れの悲しみを表している。そのほかにも、当時の大理卿（司法長官）であった楊敬之、職方郎中であった楊魯士もそれぞれ使者と息子を円仁の見送りに出し、別れの悲しみを表している。また彼らは、円仁が旅行地で便宜を図ってもらうことができるように、手紙を認めていた。この記事からも察せられるように、当時の北東アジア世界においては、たとえ国籍は違えども、国境を越えた暖かい人間愛が育まれていたことをうかがい知ることができよう。

長安を離れた円仁は、まず楚州のほうへと向かった。承和遣唐使が新羅人貿易業者であった劉愼言などを通じて帰国船便を求めたとのことである。同時に円仁は、長安に留まりながらも劉愼言とも互いに連絡を取り合っていた。円仁は、彼を通じて帰国船便を求めるつもりであった。こうして、円仁は新羅人の自治機構である新羅坊に赴き、總管の薛銓と劉愼言に、ほぼ６年ぶりに再会した。彼の喜びは計り知れないほどであったと思われる。

薛銓と劉愼言は、円仁をここから船に乗せて日本へと送るために努力を惜しまなかったが、唐の官吏は円仁の帰国の出発地が登州になっていると言い張り、これを許可しなかった。そこで仕方なくまた登州へと向かわざるをえなかった。登州へ向かう途中に、円仁一行は、泗州管内の漣水縣に到着した。ここで円仁は、以前の張保皐の部下であった崔暈と再会した。崔暈は張保皐が暗殺された後、ここに政治的な亡命をしていたことがうかがわれる。ここでも円仁は、新羅坊に留まりながら帰国する方法をさがしていたが、皇帝の勅令があまりにも厳しかったことから、実現することができないでいた。

円仁一行が海州をへて、８月 24 日についに登州の文登縣に着いたときには、すでに衣服がぼろぼろになっていたほどであった。どれほど険しい旅程であったかをうかがい知ることができよう。円仁は、ここに着いてからまず県令をたずねて、自分を勾當新羅所に送ってくれるよう要請した。このことから察するに、すでに円仁は、楚州の劉愼言からここにいる新羅人らを紹介してもらっていたと考えられる。それは円仁が、以前に自らを世話してくれた新羅人である張詠宅をまっ先にたずねたことからもうかがうことができる。円仁は、張詠に冬をすごすことができる静かな場所を紹介してくれるよう頼んでいる。円仁は、赤山法花院への滞留を望んでいたが、仏教に対する大々的な弾圧によって、すでに法花院は破壊されてしまっていた。張詠は、円仁の帰国のために前年の冬からこの年の２月にかけて船を建造した。しかし、張詠を妬む人らの反対によって、結局円仁はその船に乗って帰国することができなかった。こうして円仁は、再び劉愼言に依頼して、新羅人海上業者をさがすしか方法がなかった。時間はすでに円仁が帰国を決心してから６年がすぎていた。入唐してからはすでに９年が経過した 847 年のことであった。

劉愼言は、ちょうど蘇州を出発して日本へと向かっていた貿易船を紹介してくれた。それは、新羅人である金子白、欽良暉、金珍と唐人であった江長が運行する船であった。迂

餘曲折を経ながら、円仁は登州の乳山長淮浦で乗船することができた。また、近くに住んでいた張詠とも再会することができた。張詠は円仁との別れを惜しみながら、個人的な贈り物まで準備していた。

円仁はここでまた削剥をして僧服を着用し、ついに９月２日の正午に金珍らの船に乗り込み､赤山浦を出発して帰国の途に就いた。船は朝鮮半島の西南海をへて対馬を眺めつつ、大きな危険もなく航海を続け、９月18日に博多港へ到着した。

足かけ９年にも亘る円仁の入唐求法活動は、まさに一編のドラマであり、波乱万丈の旅程であった。彼が歩いた距離だけでも数万里に及ぶであろう。交通機関や宿泊施設が発達した現代においても困難な旅を、円仁はもっぱら仏法を学ぼうとする熱情により、あらゆる苦難を克服し、それをなしとげたのである。その苦難の旅の過程のなかに、円仁と新羅人、唐人など、国籍を越えた北東アジアの交流をみることができた。９世紀に展開されたこのような交流が21世紀の現在でも再現できるならば、それ以上の願いはない。

４．結び

以上、張保皐と円仁の足取りを通じて、平安初期に形成された北東アジア世界の人的、物的交流の様相を素描してきた。これを整理するなら、つぎのようになる。

第一に、朝鮮半島及び中国と日本は、地理的な関係により早くから交流関係をもっていた。平安時代の初期に至るや、公貿易が私貿易に転換され、その人的担当者であった商人層と海上業者が登場するようになった。

第二に、私貿易に携わる商人らのリーダーとして登場した人物が張保皐である。彼は唐での成功を基盤にして、在唐新羅人や在日新羅人、また朝鮮半島の西南海の海上業者らを自らの指揮下におき、韓中日三国の中継貿易に従事して莫大な利益をあげた。彼は日本列島にも渡ってきて、九州地域の官吏や豪族ともに交流を行うほどであった。

第三に、張保皐らが築いた北東アジア世界を経験し、そのネットワークを活用した人々は、円仁をはじめとする留学僧侶らであった。特に、円仁は承和遣唐使の一員として唐へ渡り、そこで９年間も仏法を研究した。その過程では、当然ながら唐人との交流も多かったが、新羅人の協力がなければ、彼の入唐求法活動は無事に終えることができなかったと思われる。国籍は違えども、彼らは互いに暖かい人間愛を背景にして親交を深めていったのである。我々は当時の北東アジアに展開されたような国家の枠を越えた、すなわち国境を超越した北東アジア間の人的交流を活性化させることによって、明るい未来を開いていくことに努めなければならないであろう。

参考文献

『入唐求法巡禮行記』
『続日本後紀』
『類聚三代格』
『日本紀略』
『続群書類従』
『平安遺文』
『三国史記』
『三国遺事』
『旧唐書』
『唐會要』
李炳魯「古代における日本列島の‘新羅商人’に関する考察」『日本学』第 15 号、東国大学校日本学研究所、1995 年。
李炳魯「張保皐と文室宮田麻呂の交易に関する研究」『大丘史学』第 79 号、大邱史学会、2005 年。
李炳魯「９世紀における在唐新羅人商人と唐商人に関する研究」『日本語文学』第 45 号、2009 年。
佐伯有清『高丘親王入唐記』吉川弘文館、2002 年。
佐伯有清『円仁』吉川弘文館、1989 年。
石井政敏「９世紀の日本－唐－新羅三国間の貿易について」『歴史と地理』第 394 号、1988 年。
E. O. ライシャワー、田村完誓訳『円仁・唐代中国への旅』原書房、1984 年。
浦生京子「新羅末期の張保皐の台頭と反乱」『朝鮮史研究会論文集』第 16 号、1979 年。
金庠基「古代の貿易形態と羅末の海上発展について」『東方文化交流史論攷』乙酉文化社、1948 年。

キーワード　張保皐　円仁　北東アジア世界　在唐新羅人　人的・物的交流　交易

（LEE Byung-Ro）